

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

### 蜷川壽恵先生

日時：2011年2月12日

場所：東京都世田谷区弦巻

聞き手：大木匡尚・茨木智志

#### はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を中心として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、蜷川壽恵（にながわ じゅけい）先生がお引き受け下さった。蜷川先生は1924年のお生まれで、在学中の学徒出陣を経て、大学卒業後に郷里の富山県で教員をされた後に東京都の教員となり、特に高校の日本史教師として活躍されてきた。

2011年2月12日に、蜷川先生は1955年前後のことまでのお話をお聞かせ下さった。そして、再度のインタビューの申し出にご快諾を下さったが、まことに残念ながら、6月13日にご逝去された。そのため、日本史教師として本格的に活躍された時期のお話を伺うことがかなわなくなり、インタビュー記録作成に際して不可欠なご本人の確認も頂くことができなくなった。しかし、ご自分の経験が「これからの方々にお役に立つことがあれば、利用して頂いて、と思います」という、インタビューをお引き受け下さったときの蜷川先生のお言葉を無にすることはできないと判断した。そこで、ご家族のお許しを頂き、伺いえた部分のみではあるが、以下のインタビューの記録を掲載する。

#### 1. 旧制富山高等学校尋常科・高等科の卒業まで

— 本日は、よろしくお願ひ致します。はじめに、生い立ちから大学に入学されるころまでのことをお聞かせ下さい。

私は、大正13（1924）年8月に、富山県滑川市なめりかわで生まれました。滑川は、富山県の東部、富山市から少し新潟よりのところにあります。

— 後に、東京帝国大学<sup>1</sup>で国史（日本史）を専攻されたと伺っていますが、大学に進学される前は、ずっと富山県の滑川にいらしたのでしょうか。

そうです。旧制高等学校<sup>2</sup>は、県立富山高等学校<sup>3</sup>を出しました。ご存知のように、旧制の学校制度では、帝国大学に入るためには高等学校を卒業する必要がありましたが、幸いに富山県には富山高等学校がありました。富山高等学校は、馬場さんという日本海の家運業者のかたが、第一次世界大戦でたくわえた財を、郷里のお役に立つならばということで、若い人材を育成するために、県に寄付して建てた学校でした<sup>4</sup>。

ちょうど、原敬内閣<sup>5</sup>のときに一次大戦後の高等教育拡充の方針があり、力を入れていました。大正 9（1920）年前後のことです。当時、旧制高等学校は、ナンバースクール<sup>6</sup>として名古屋の第八高等学校まで 8 つしかなかったのが、山口高等学校（1919 年設立）や山形高等学校（1920 年設立）など 4～5 つ建てられました。浦和高等学校（1921 年設立）とかは、さらに後でした。

金沢には第四高等学校がありましたが、富山にも高等学校をということで、県立富山高等学校ができました。当時のお金で百万円を富山県に寄付した利子で維持費を賄っていました。場所は富山市の外港の岩瀬でした。ここは神通川の河口になります。広い敷地も用意されて、大正 12（1923）年の皇太子殿下ご成婚（のちの昭和天皇）の記念という名目で創設されました。

— 高等学校は、富山高等学校というお話ですが、中学校はどちらにいらしたのでしょうか。

富山高等学校は、七年制高等学校でした。私は、その尋常科に入りました。尋常科は中学校程度ですので、尋常小学校を卒業して入ります。富山高等学校の中の中学校程度の学校であった尋常科は、戦後は全部吸収されて残っておらず、今は基本的に富山大学になっています。県立でしたが、戦時中の昭和 18（1943）年に、財政難もあり、

<sup>1</sup> 東京帝国大学：現在の東京大学（本郷地区キャンパス）。1947 年 9 月に東京大学と改称した。

<sup>2</sup> 旧制高等学校：戦前における男子の 3 年制の高等教育機関。卒業後、3 年制の旧制の大学に進学するのが通常であった。1950 年まで存在し、地域のエリート養成を担った存在であった。

<sup>3</sup> 富山県立富山高等学校（富山県上新川郡大広田村。現・富山市蓮町）：戦後に富山大学文理学部となり、後に経済学部、人文学部、理学部などに改組された（富山市五福）。

<sup>4</sup> 馬場はる子が馬場正治親権者として 1923 年 5 月に富山県知事に寄付をし、1924 年 4 月に開校した（富山大学年史編纂委員会編『富山大学五十年史』上巻、2002 年、179 頁）。

<sup>5</sup> 原敬内閣：原敬（1856～1921 年）が立憲政友会総裁として 1918～1921 年に組閣した内閣。初の本格的な政党内閣として知られる。高等教育の拡充などの四大政綱を進めた。

<sup>6</sup> ナンバースクール：旧制高等学校の中でも明治期に創設された第一から第八までの官立高等学校を指す呼称。東京（第一）、仙台（第二）、京都（第三）、金沢（第四）、熊本（第五）、岡山（第六）、鹿児島（第七）、名古屋（第八）の各市に存在した。その後に設立された高等学校は地名を冠した学校名が付けられた。

<sup>7</sup> 富山高等学校は 1943 年の官立移管にともなって、尋常科の募集を停止した。

官立（国立）になりました。当時は中学校を5年で卒業して、高等学校に入学するのが普通でしたが、七年制高等学校では、中学校4年修了で高等学校に入学できる制度を利用して、特に入学試験を受けないで、尋常科から高等科に進めるというものでした。大変に恵まれた環境でした。学年は尋常科の1～4年があり、高等科の1～3年となります。

— 小学校はどちらに通われていたのでしょうか。

尋常小学校は、寺家小学校<sup>8</sup>でした。滑川には、寺家と田中<sup>9</sup>という2つの小学校がありました。昭和12（1937）年に、ここを卒業して、先ほどお話ししたように、富山高等学校尋常科に入りました。

— 小学生や中学生の頃から、歴史に興味がおありだったのでしょうか。

そうですね。私は、小さいころから、歴史に関心がありました。この国土には古く、長い歴史があるわけですから、地元の旧跡や史跡とかを訪ねることが好きでした。立山信仰<sup>10</sup>に関わる場所もありました。

中学や高校でも歴史の研究班に入っていました。今でいうと歴史クラブです。校内で発表するようなこともありました。「紀元二千六百年<sup>11</sup>」に関することや、越中（富山県）の史跡などをやりました。

高等学校で学んだ頃ですが、ちょうど尋常科の4年のときでしたか、昭和15（1940）年の「紀元二千六百年」ということで、歴史に対して非常に力が入られたブームの頃でした。『国史概説』とか、『国史概観』でしたか、いろいろな本が発行されたりもしました<sup>12</sup>。記憶が曖昧ですが、その二千六百年を記念して、小学校向け、中学校向け、高校向けなどの本が出る予定であったのが、大学向けの『国史概説』だけが出たと聞きました<sup>13</sup>。この『国史概説』は、上巻があつて、下巻が出なかったと思いました<sup>14</sup>。これは大学に入ったところに手に入れて読みました。個人で書いた国史の本もた

<sup>8</sup> 滑川町立寺家尋常高等小学校：現在の滑川市立寺家小学校（滑川市寺家町）。

<sup>9</sup> 滑川町立田中尋常高等小学校：現在の滑川市立田中小学校（滑川市加島町）。

<sup>10</sup> 立山信仰：立山は、富山県東南部の立山連峰の3000メートル前後の主峰群を指す。古来、地獄と極楽の信仰を中核とした修験道の山として知られ、信仰登山が盛んに行なわれた。

<sup>11</sup> 「紀元二千六百年」：西暦1940年・昭和15年は、初代の天皇とされる神武天皇の即位から2600年となるとされ、このことを祝賀して全国各地で記念行事や式典が行なわれた。

<sup>12</sup> 三上参次著・辻善之助監修『国史概説』（富山房、1943年）、黒板勝美『資料摘録国史概観』（吉川弘文館、1936年〔1941年訂9版〕）などがある。

<sup>13</sup> 文部省『国史概説 上』（内閣印刷局、1943年1月）。

<sup>14</sup> 実際には、文部省『国史概説 下』（内閣印刷局、1943年3月）と『文部省編纂 国史概説索引』（奥付なし、48頁）の冊子が存在する。ただし、上巻の修正版（1943年7月発行）に対応する下巻の修正版は確認できていない。

くさん出されました。黒板勝美<sup>15</sup>先生の『国史の研究<sup>16</sup>』が膨大なものでありましたが、簡単なものも書かれていたと思います。

— 尋常科・高等科での歴史の授業や教科書は、どのようなものでしたか。

歴史の授業は、講義式が主でしたね。東京に出て来てから（後述）、滑川の実家で、昔の教科書を探したことがありました。姉や弟、妹が使った教科書はあったのですが、どういうわけか、自分が使った教科書は残っていませんでした。

— 七年制高等学校について、もう少し伺います。尋常科と高等科の生徒は、同じ先生がたから教わっていたのでしょうか。また、どのような生徒が入学していたのでしょうか。

尋常科を教える先生は、中学校の教員免許状ですが、高等科の先生は、高等学校高等科の教員免許状が別に必要でした。兼務ということはありませんが、先生は基本的に別でした。尋常科の先生がたは、高等師範学校<sup>17</sup>を出られた方が多かったですね。尋常科の1学年は2クラスでした。しかも、1クラスはふつう50人の時代に、40人でした。全部で尋常科は320人ですので、学年が違っていてもお互いに何となく分かりました。ですので、学校としては、こじんまりしていました。とても恵まれた学校でした。

高等科には、遠く九州地方や東海地方からも入学者がおりましたように、全国から集まっていました。尋常科は地元がほとんどですが。

— 滑川のご自宅からでしたら、富山高等学校まで電車で通学されていたのでしょうか。

当時、電車はあまりありませんので、汽車になりますが、滑川駅から東岩瀬駅まで通いました。電車ですと、私が小学校に入ったときに、今の富山地方鉄道の前身である富山電気鉄道<sup>18</sup>が敷設されました。また、それ以前には、私の故郷の滑川から立山登山のための立山鉄道<sup>19</sup>という軽便鉄道も作られていました。これは、ふもとの岩嶺寺

<sup>15</sup> 黒板勝美：1874～1946年、日本古代史専攻。

<sup>16</sup> 黒板勝美『国史の研究』は初版（文会堂、1908年）、改補再版（文会堂、1913年）に次いで、更訂第三版が、「総説」（1931年）、「各説 上」（1932年）、「各説 下」（1936年）として岩波書店から発行されて、戦後まで版を重ねた。

<sup>17</sup> 高等師範学校：戦前において中学校・高等女学校などの中等段階の諸学校の教員養成を担った4年制の高等教育機関。

<sup>18</sup> 富山電気鉄道：1930年設立。1943年・1944年に県内の私営の鉄道・バスを合併して、富山地方鉄道株式会社となった。

<sup>19</sup> 立山鉄道：1913年に立山軽便鉄道として設立され、1917年に立山鉄道と改称された。滑川駅から、

まででしたか。

— 高等学校高等科を卒業されたのは、昭和 19 (1944) 年 3 月になりますでしょうか。

高等科 3 年を終えたのは、昭和 18 (1943) 年 9 月となります。本来は、昭和 19 (1944) 年 3 月に卒業の予定でしたが、戦争中であったため半年間の短縮となりました。そのため 3 年間のところを 2 年半で出たこととなります<sup>20</sup>。

## 2. 東京帝国大学文学部国史学科への入学

— 大学に進学したときのことをお聞かせ下さい。

大学には、昭和 18 (1943) 年 10 月に進学しました。大学入学の試験は、ほとんどが口頭試問で済んだ程度でした。当時は高等学校以外にも専門学校<sup>21</sup>などがありましたが、帝国大学は基本的に旧制高等学校を卒業しないと進めないというものでした。北海道や東北などの帝国大学は、試験で合格すれば専門学校卒業生も進学できましたが、特に東京帝国大学は、高等学校卒業生以外はとらないという学校でした。

記憶では、受験は 8 月初めでした。文学部の進学は比較的楽でした。国文、国史というのは、この頃に定員増になったかとも思いました。学部の学科によって、入学試験の有無も違うものでした。国史学科に進んだのは、歴史は好きでしたし、先ほどお話ししたような、当時の歴史ブームという波も影響したかと思います。

入学してから 1 年は、杉並 (東京都杉並区) にいた、叔父の家から通いました。ただ、戦後は住宅事情や食糧事情が悪くなり、迷惑もかけられなくなりました。ちょうど、南原繁<sup>22</sup>学長のときに、弥生学寮が開かれました。これは、大学の第二食堂の 3 階の会議室を、学生の宿舎として開放したものでした。布団を持ち込んで、そこに住みました。

— 文学部国史学科の入学者は、何人いたのでしょうか。

文学部の国史学科には 32 人が入りました。定員は 30 人でしたので、2 人多くなっています。結局は、希望者を全員、入学させたのだと思います。

当時、旧制高校は 8 つのナンバースクールを含めて 25 校ほどありました。台湾の台北高等学校<sup>23</sup>と旅順の旅順高等学校<sup>24</sup>、そして朝鮮などからも来ていました。以前に調

---

1921 年には立山駅 (現在の岩峠寺駅付近) までが開通し、1931 年に富山電気鉄道に合併された。

<sup>20</sup> その後、さらに 2 年に短縮されたが、敗戦後に急速 3 年に戻された。

<sup>21</sup> 専門学校：旧制の専門学校令による高等教育機関。当時は、経済専門学校 (旧高等商業学校)、工業専門学校 (旧高等工業学校) などが存在し、多くは戦後の新学制下で新制大学となった。

<sup>22</sup> 南原繁：1889～1974 年、政治学専攻。当時は東京帝国大学総長であった。

<sup>23</sup> 台北高等学校：1922 年設立の台湾総督府所管の高等学校。現在の台湾省台北市に存在した。

べたところでは、外地<sup>25</sup>の高等学校から東京帝国大学に入学した学生のほとんどは、日本人でした。ただし、台湾の場合、2割ほどの人は、姓が中国の一字姓であったので、台湾人の学生もそのくらいはいたようです。国史学科は、東洋史学科や西洋史学科などに比べて人数は多かったです。

一 当時の国史学科には、どのような先生がたが、いらしたのでしょうか。

本の著者として名前を知る人に直接教わりましたので、当時は、恐れ多い思いでした。非常に右翼的な言動で知られた平泉澄<sup>26</sup>先生がいました。それから、板沢武雄<sup>27</sup>先生がいました。中村孝也<sup>28</sup>先生にも教わりました。板沢先生には一番お世話になりました。

私が入学したときには、黒板勝美先生、辻善之助<sup>29</sup>先生は、すでに退職されて、史料編纂所<sup>30</sup>にいました。

国史学科の主任教授は平泉先生でした。平泉先生の国史学演習がありました。演習は、平泉先生のもとで学生を鍛えるということであったようです。怖いかたではありましたが、親しむと親切に教えて頂けることもありましたが、戦争中は平泉先生との関係で、右寄りのかたが国史学科にいたこともありましたが、戦後は残らなかったと思いました。

ここに当時の東大の便覧がありますが、これを見ますと講師としていらした先生がたのお名前もあります。龍肅<sup>31</sup>先生、宝月圭吾<sup>32</sup>先生が講師として、講義としては一部でしたが、戦後には、いらっしゃいました。相田二郎<sup>33</sup>先生は、古文書学を担当されていました。坂本太郎<sup>34</sup>先生は、お若くて助教授でした。石井良助<sup>35</sup>先生が法学部からいらしていました。卒業に必要な単位は、学科単位で決められていましたが、文学部の講義は所属する学科を問わずに受けることができました。

先ほども言いましたが、平泉先生は国史学演習でした。平泉先生の担当には、日本思想史講座というものがあったと記憶しています。これは先輩に聞いた話ですが、昭和13(1938)年に国史の講座に加わったもののようです。ただし、看板がついただけか、

<sup>24</sup> 旅順高等学校：1940年設立の関東局所管の高等学校。現在の遼寧省旅順市に存在した。

<sup>25</sup> 外地：一般に本来（現在）の日本の領土の他に、敗戦まで日本が領有等をしてきた台湾、朝鮮、関東州、南樺太、南洋群島などを指す。「満洲」を含める場合もある。

<sup>26</sup> 平泉澄：1895～1984年、日本中世史専攻。

<sup>27</sup> 板沢武雄：1895～1962年、日蘭交渉史専攻。

<sup>28</sup> 中村孝也：1885～1970年、日本近世史専攻。

<sup>29</sup> 辻善之助：1877～1955年、日本史学、日本仏教史専攻。

<sup>30</sup> 東京大学史料編纂所（東京大学本郷キャンパス）。当時は文学部内の組織であった。

<sup>31</sup> 龍肅：1890～1964年、日本中世史専攻。

<sup>32</sup> 宝月圭吾：1906～1987年、日本中世史専攻。

<sup>33</sup> 相田二郎：1897～1945年、日本中世史、古文書学専攻。

<sup>34</sup> 坂本太郎：1901～1987年、日本古代史専攻。

<sup>35</sup> 石井良助：1907～1993年、日本法制史専攻。

机が増えたくらいであったのではないのでしょうか。

36 番教室という 200 人くらい入るような講堂のようなところや、100 人くらいの教室などでも講義がありました。それでも、やはり、鍛えられ、教授の先生と親しみになるのは、さまざまな演習でした。せいぜいで 20 人くらいでテキストを輪読したり、『吾妻鏡<sup>36</sup>』などの古典や古文書などの史料を読む力を教わったりしました。

高等学校は戦時短縮により 2 年半で卒業になりましたが、大学はそのまま 3 年間の予定でした。ですので、昭和 21 (1946) 年 9 月卒業の予定でしたが、軍隊に行きましたので、半年延びて、昭和 22 (1947) 年 3 月に卒業となりました。

### 3. 学徒出陣による入隊

— 蜷川先生は、『学徒出陣—戦争と青春—』(吉川弘文館、1998 年)をお書きになっていますが、ご自身の学徒出陣のご経験をお聞かせください。

大学在学中に学徒出陣になります。実際に入隊したのは、昭和 20 (1945) 年の 1 月でした。その前の昭和 19 (1944) 年に、徴兵検査を受けました。昭和 18 (1943) 年 10 月の神宮外苑での行進のとき<sup>37</sup>は、私は年齢がまだ入隊にかかっていませんでしたので、参列学徒といいましたが、参列していたほうでした。私の本に、このときの図面を載せてあります<sup>38</sup>。

徴兵令を見ると分かりますが、徴兵検査は 4 月から始まって、満 20 歳になった年の 12 月が毎年の入隊のときでした。大学等に在籍している者は、入隊が延期されていましたが、昭和 18 (1943) 年に徴兵延期が停止になります。そこで、いっせいに学徒出陣となりました。

徴兵検査は本籍地が基本でしたが、私は寄留地ということで手続きをして、東京で受けました。先ほど述べたように、昭和 19 (1944) 年になります。そのときには、卒業までの延期願いはなくなっていました。大学は、本当に、ガラッとしてしまいました。理科系の学生はまだ残っていましたが<sup>39</sup>、特に人数の多い法科や経済の学生がいた文科系はそうでした。

---

<sup>36</sup> 吾妻鏡：治承 4 (1180) 年から文永 3 (1266) 年までの鎌倉幕府の事績を編年体で記録した歴史書。鎌倉時代の政治や社会を知るための重要な史料。

<sup>37</sup> 徴兵猶予が停止され、1943 年 12 月の入隊を控えた大学・高等学校・専門学校の学生・生徒に対して、各地で壮行会が開かれた。首都圏の一都三県の 77 校の学徒には、10 月 21 日に明治神宮外苑競技場(現・国立競技場)において文部省と学校報国団本部の主催で出陣学徒壮行会が開催された。行進した学徒は 2 万 5000 名前後と推測され、見送った男女の学徒は 6 万 5000 名と報道された。雨の中を行進する映像で知られる。詳しくは、蜷川壽恵『学徒出陣—戦争と青春—』(吉川弘文館、1998 年)の 6 頁以下を参照。

<sup>38</sup> 蜷川壽恵・同上書 14 頁の「式場整列位置および隊形要図」参照。

<sup>39</sup> 徴兵猶予は停止されたが、理工系や教員養成系の学生に対しては、しばらく入営延期の措置が取られた。

一 召集令状が来て、入隊ということになるのでしょうか。

いえ、現役召集という形になります。徴兵検査の結果は、甲種合格、第一から第三の乙種合格、丙種合格などがありました。丙種合格までは、軍隊に入る義務がありました。ただし、普通でしたら、丙種合格では、軍隊に入るものではありませんでした。せいぜいで第一乙種合格くらいまででした。昭和 10 (1935) 年くらいの頃には、現役兵削減があつて、甲種合格でも籤外れ<sup>くじがはずれ</sup>ということ、抽選で落ちたら入らなくてもいいということもありました。日華事変 (日中戦争。1937 年～) が始まる前くらいのことです。私は第三乙種合格でしたが、軍隊に入りました。

一 入隊のときのお気持ちは、どのようなものでしたのでしょうか。

学徒出陣は衝撃でした。今までは、卒業するまでは勉強することが保障してもらえるものと考えていました。それが、できなくなることは大きな衝撃でした。

一 どちらに入隊されたのでしょうか。

陸軍機甲整備学校の輜重<sup>しゅうじゆう</sup>に入ります。いわゆるエンジンを勉強させるところです。もともと徴兵検査のときに、兵種<sup>へいしゆ</sup>というか、入隊先を決められます。徴兵検査を受けるときに資格のある者は、ほぼ強制的に幹部候補生の願書を書かされます。陸軍機甲整備学校の輜重を、私が希望したわけではありません。振り分けられたものです。特に金沢に第九輜重兵連隊があつて、そこに入る予定でした。

昭和 18 (1943) 年頃にできた特別甲種幹部候補生の制度があつて、すぐに学校に入ったわけです。普通は二等兵で各連隊に入って 3 か月くらい訓練をして、幹部候補生試験を受けるわけですが、速成で幹部候補生を養成しようというものでした。高等教育を受けた者は二等兵を経過しないで、すぐに、下士官の伍長<sup>ごちやう</sup>になって各兵種の幹部を養成する学校に入れるということになりました。一番多いのは歩兵でした。

場所は、世田谷の今の東京農業大学 (東京都世田谷区桜丘) です。ここには、もともと陸軍機甲整備学校がありました。現役の陸軍将校は士官学校<sup>40</sup>を出ますので、我々の場合は予備将校となります。予備将校は各連隊で選抜されるものでした。一般の部隊での体験も省略して、学生時代に幹部候補生の試験をして、試験といっても身体検査と口頭試問をして、入隊するということになりました。

一 陸軍機甲整備学校とは、どのような学校なのでしょうか。

学校といいましても、要するに軍隊です。3 つの兵種がありました。第一大隊が戦

---

<sup>40</sup> 陸軍士官学校：敗戦まで存在した陸軍の士官養成のための教育機関。



車兵、第二大隊が大砲を引っ張るキャタピラの牽引車、第三大隊が自動車隊でこれが輜重兵でした。それでも、一般の軍務をして、一期の検閲に合格する必要がありました。1月に入って、3月でしたか、4月でしたかに、その検閲がありました。

そして、9月か10月に卒業して、各部隊に配属されるはずであったのが、戦況悪化により早まって8月末に配属される予定になったようでした。それでも、卒業前に終戦になりましたので、戦地に行くことはありませんでした。大学からの学徒出陣の人もいましたが、専門学校の人もありましたし、隊内から選ばれて来た人もいました。

— 在学中であったと伺いましたが、大学では、どのような扱いになっていたのでしょうか。また、昭和20(1945)年8月15日には、どちらにいらしたのでしょうか。

大学のほうは「兵役服務のための休学」という扱いになりました。

8月15日は、整備学校で迎えました。集められて玉音放送<sup>41</sup>を聞きました。普通の部隊は軍旗<sup>42</sup>が、天皇の代わりということで掲げられていたものでしたが、我々の学校は御真影<sup>43</sup>を奉じていました。終戦の当日でしたか、この御真影を火で焼いたのを覚えています。軍旗ならびに、それに準ずるところのものを焼くという司令部からの指示があったのだと思います。

8月30日に兵役解除になって除隊ということになりました。それまでは学校にいました。捕虜になってどこかに送られるとかの話もあり、不安な半月でした。中隊長の訓話や戦後の心構えの話などはありませんでしたが、授業はなくなりました。

— 玉音放送を聞かれたときのお気持ちはどのようなものでしたでしょうか。

学徒出陣も衝撃でしたが、終戦というのは、大きな衝撃でした。自分がこれから勉強できるのかということもありました。やはり自分の未来はどうなるのか、という思いは強かったと思います。なにしろ国が負けるということでしたし、今までにない初めてのことでした。

8月9日くらいでしたが、ポツダム宣言<sup>44</sup>がありました。そのことが軍隊内部にも伝

---

<sup>41</sup> 玉音放送：「玉音」とは、天皇の肉声のこと。昭和天皇が録音した「終戦の詔書」（1945年8月14日）が、1945年8月15日正午にラジオで放送された。日本では、この時点をもって戦争の終結とされる。

<sup>42</sup> 軍旗：陸軍の場合、連隊ごとに天皇から「親授」されたものとして神聖視された（連隊旗とも称する）。

<sup>43</sup> 御真影：天皇（および皇后）の写真。明治の終わりごろから各学校に「下賜」された。教育勅語とともに独立した耐火式の「奉安殿」に収められるのが通常であった。

<sup>44</sup> ポツダム宣言：1945年7月17日から8月2日にかけてドイツのポツダムで行なわれたアメリカ・イギリス・ソ連の首脳によるポツダム会談に際して、アメリカ・イギリス・中国の共同声明として7月26日に発表された宣言。日本の無条件降伏を求めたもの。7月28日、日本政府は「黙殺」したが、8月6日に広島に原爆が投下され、8月9日に長崎に原爆が投下され、同日にソ連が対日宣戦布告を宣言してポツダム宣言に加わった。

わりました。150人ずつの二期で300人くらいいました中隊の中隊長が、これからの世の中はどうなるか不安であろうけれども、みな迷うことなく、と訓示を受けました。不安はありましたが、ただ、私たちは職業軍人ではありませんでしたので、これで家に帰れる、大学に戻れるということはありませんでしたから、それほどの動揺ではなかったと思いますけど、やはり日本が負けて相当に混乱するし、勉強できるかという不安はありました。

#### 4. 終戦による復学から大学卒業まで

— 戦争が終わって、すぐに大学に戻られたのでしょうか。また、大学はどのような状態でしたでしょうか。

除隊後に郷里の富山県に戻りました。9月に復学になりましたが、大学もまともな授業はなく、活動を停止していました。東京は、ともかく焼け野原です。生活ができず、半年は郷里にいました。ようやく昭和21(1946)年2月末であったと思いますが、新円切り替え<sup>45</sup>(2月16日発表)を機会に、生活できるか、復学できるかを確かめるために、東京に行ってみようと考えました。ただ、講義もまともにはなかったと記憶しています。

国史学科の教授は、板沢先生、坂本先生のお二人がいました。平泉先生と中村先生は終戦とともに辞められました。昭和21(1946)年の5月だと思いましたが、授業が始まりました。

— 卒業論文は、どのようなテーマでお書きになったのでしょうか。

卒業論文は、キリシタン史で書きました。題目は2年のときに決める必要がありました。戦後になって社会の方向も歴史学の方向も大きく変わるときでした。特に日本史はそうでした。これからの時期に外来文化を日本がどのように受け入れるのかという問題がありました。

その中でも、私は、宗教にしぼってキリスト教が日本にどのような影響をもたらしたのか、16世紀に入ってきたキリスト教について日本の受け取りかた、受容の仕方から、何か学ぶところがあればと考えました。戦争中には日本思想というかなり右寄りの方向がありましたが、戦後は世界に目を開くということで、その中で宗教というものを考えてみたほうがいいのではないかと思います。ご指導は板沢先生でした。坂本先生は古代史でしたし、板沢先生は蘭学のご専門でしたが、板沢先生にご指導をお願いしました。

---

<sup>45</sup> 新円切り替え：敗戦後の急激なインフレを抑制するため、幣原喜重郎内閣(1945年10月～1946年5月)が出した金融緊急措置令。預金封鎖と新円切り替えにより通貨量の縮小を図ったが、インフレにはあまり効果はなかったと言われる。

## 5. 富山県立高校での教員生活

— 大学卒業後のことをお聞かせください。

昭和 22 (1947) 年 3 月に大学を卒業して、故郷の富山県に帰って教師になります。ただ、実家は寺院を経営していましたし、卒業してどうするという方針も定めかねて、確定はせずにいたこともありました。父は、私が軍にいる間に亡くなりました。

旧制の県立滑川中学校<sup>46</sup>の教授嘱託になります。要するに非常勤の講師でした。4 月から話はあったのですが、手続きのこともあり、辞令は 5 月 1 日でした。当初の半年は、担任はありませんでしたが、その後は担任も持ちました。教官心得を経て、専任の教諭になりました。当時は人手が足りないということもあり、いろいろなものを教えました。歴史の担当の先生は他にもいましたので、国語漢文と英語を担当させられました。

このころ教員の免許状は卒業後、半年くらい遅れて出るものでした。今は各県の教育委員会から出ますが、当時は文部省が出していました。それでも、臨時免許状というものは出ましたので許可は出ました。臨時免許状は、学歴や、文部省に免許申請中であることなどを書けば出るものでした。滑川は、昭和 23 (1948) 年に旧制中学校から新制高等学校に変わりますが、昭和 27 (1952) 年 3 月まで 5 年間いました。

その間に、社会科の授業は持ちました。ただ、当初は、歴史の授業は停止になっていました<sup>47</sup>。入った年は、教育課程の変遷が目まぐるしい状況で、半年で担当の授業が変わることもありました。歴史は、東洋史や西洋史があり、そして世界史が新しくできました<sup>48</sup>が、「お前は若いから新しいのをやるように」と言われました。日本史よりもこちらが多かったですね。

— 当時の教科書をいくつかお持ちしました。『西洋の歴史 (1)』(中等学校教科書株式会社著作・発行、1947 年) は、使われましたでしょうか。

『西洋の歴史 (1)』は、使った記憶があります。何年に使ったかは、正確には分かりません。確か下巻に当たる『西洋の歴史 (2)』は出なかったはず<sup>49</sup>です。世界史になっても、これを使っていたかもしれません。

---

<sup>46</sup> (旧制) 富山県立滑川中学校：現在の富山県立滑川高等学校 (富山県滑川市)。

<sup>47</sup> 占領軍の指令「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」(1945 年 12 月 31 日) により「国史」の授業は新しい教科書が届くまで停止された。

<sup>48</sup> 旧制中学校等では「東洋史」「西洋史」による授業が敗戦以後、停止されずに継続されており、1948 年 4 月発足の新制高等学校でも社会科の選択科目として存続していた。1949 年 4 月からは「東洋史」「西洋史」が改められて、「日本史 (発表時は「国史」と称した)」「世界史」が実施された。

<sup>49</sup> 『西洋の歴史 (1)』のキリスト教記述が問題とされ、『西洋の歴史 (2)』『東洋の歴史 (1)・(2)』の発行は許可されなかった。

— 『100 ページの世界史』（尾鍋輝彦著、新教育事業協会、1949 年）は、使われましたでしょうか。

歴史の授業を担当しなくても、歴史教科書は見ておりましたが、この『100 ページの世界史』は、初めて見ました。

滑川にいたころでは、日本史の教科書も満足にありませんでした。

— 滑川高等学校を異動されて、どちらにお勤めになったのでしょうか。

5 年後の昭和 27（1952）年 4 月に富山県立雄峰高等学校に異動しました。これは富山市にある定時制の学校です。富山県での唯一の夜間の定時制高等学校でした<sup>50</sup>。富山中部高等学校（富山市芝園町）に併設されていました。昼間の家での寺の経営と、夜間の高校での勤務を並行しました。

ここでも日本史に限らず、いろいろ担当しました。英語や一般社会、時事問題がありました<sup>51</sup>。時事問題は、滑川高等学校にいたときも、時事通信社からの週報（世界週報）を題材にしました。世界史も持ちました。

— どのような歴史の授業をされていたのでしょうか。

私が富山県にいたときには日本史を担当したのは、むしろ少なかったですね。戦後に、歴史は冷や飯を食ったような面がありました。そのため割に広い視野でものを見るように、一般社会や時事問題を通じて、社会のいろいろなことを融合して教えることが多かったです。

— 蛭川先生は、戦前の歴史教育を受けられて、戦後の歴史教育をなさった世代であると存じますが、戦前と戦後の戸惑いとか、工夫とかはございましたか。

東大の国史学科が「右寄り」であったこともあり、大きい転換を迫られたことは事実でした。ただ、東大でもそうでない人もいましたし、学科もいろいろとあり、その間の交流もありました。割合に融通性のある勉強はできました。前に述べました卒業論文もそのような影響のもとで書きました。

---

<sup>50</sup> 現在の富山県立雄峰高等学校（富山市赤江町）は、昼間単位制・夜間単位制の定時制課程、通信制課程、専攻科の 4 つの課程で構成されている。

<sup>51</sup> 新制高等学校では、1 年生が「社会（後に「一般社会」と称する）」5 単位を必修科目として履修し、2～3 年生が「東洋史」「西洋史」「人文地理」「時事問題」の各 5 単位の中から 1 科目を選択科目として履修することが求められた。前述のとおり、1949 年度から「東洋史」「西洋史」は「日本史」「世界史」となる。

## 6. 東京都への移転と中学校教員

— 東京に移られた前後のことをお聞かせください。

昭和30(1955)年に東京に移りました。移るにあたって、東京都の教員採用試験はありました。郷里を出ることですから、今から考えれば、思い切ってよく出て来たなと思います。戦中・戦後のまともな勉強のできなかつた時期もあり、もう少し勉強したいと考えました。富山には富山大学もあり、受講したこともありましたが、基本的に旧制高等学校と先生がたも同じでしたし、東京には友人関係などの周囲の環境もあり、やはり東京で勉強をしたいと思いました。

大学への復学という形にはしませんでした。東京に来てからは、教師をしながら、正規ではない形で、母校で勉強しました。受講した中には、講師として来ておられた家永三郎<sup>52</sup>先生の講義を、許可をいただいて聴いていたこともありましたが、主に、夜に図書館で勉強していました。

東京に来てからは、武蔵野市立第一中学校(武蔵野市中町)に勤めました。成蹊学園(武蔵野市吉祥寺北町)のある通りにありました。その近くの市営のアパートに住んでいました。中学校の授業は、社会だけでなく、英語も持ちました。当時は、英語の免許も取っていました。

## 7. 辞令や免許状、証明書

— 英語の免許を取られたとのお話ですが、蛭川先生は何の教員免許をお持ちなのでしょう。

ご参考までに、辞令や免許状などを持って来ましたので、ご覧ください。

— 拝見します。辞令は旧制の富山県立滑川中学校の教授嘱託から、東京都立永山高等学校<sup>53</sup>の校長の辞令までございますね。学習指導要領作成協力者の辞令もございますが、これは現代社会ですか。

日本史の他にも、現代社会などもやりました<sup>54</sup>。

---

<sup>52</sup> 家永三郎：1913～2002年、日本史学・思想史専攻。

<sup>53</sup> 東京都立永山高等学校：東京都多摩市永山。なお、蛭川氏は1957年4月から東京都立玉川高等学校教諭、1963年5月から戸山高等学校教諭、1976年4月から南高等学校教頭、1981年4月から永山高等学校校長を務められ、1985年3月に退職された。

<sup>54</sup> 蛭川氏は、1969年4月から学習指導要領(特別活動)執筆協力者、1972年10月から教育研究開発協力者会議協力者、1974年3月から指導資料(日本史)執筆協力者、1975年4月から高等専門学校教育課程調査会(歴史)協力者、1977年4月から学習指導要領(社会)執筆協力者、1978年9月から学習指導要領解説(現代社会・日本史)執筆協力者、1980年4月から指導資料(日本史)執筆協

- 教員免許状を拝見します。昭和 22 (1947) 年 6 月の歴史科の中等学校教員免許と 9 月の日本史及び東洋史の高等学校高等科教員免許の無試験検定の合格の免許がございますが、これとは別に、昭和 24 (1949) 年の社会の高等学校教員一級普通免許状と中学校教員一級普通免許状がございます。昭和 24 (1949) 年の高等学校のものは、「社会 (日本史及び東洋史)」と書いてあります。

昭和 22 (1947) 年の免許状は、古い学校制度のもので、昭和 24 (1949) 年の免許状は、古い免許状をもとにして、新しい免許状に切り替えたものですね<sup>55</sup>。

- 英語の高等学校教員二級普通免許状は、昭和 27 (1952) 年になっています。

採用されたところが英語を必要としていたため、そのころに大学だかの証明書を添えて提出したと記憶しています。

- 軍隊に関する証明書が 2 通ございますが、一つは「証明書」として「右者特別甲種幹部候補生たることを証明す<sup>56</sup>」と、昭和 20 (1945) 年 8 月 29 日付で証明されています。これはどのようなものなのでしょうか。

除隊のときに、何かの役に立つだろうということで、もらって取っておいたものです。軍隊手帳は残っていないので、焼いたのかもしれない。

- もう一つは、「軍歴証明書」ですが、昭和 20 (1945) 年 1 月 10 日に特別甲種幹部候補生として陸軍機甲整備学校幹候隊に入隊したこと、8 月 30 日に復員したことが記載されています。この証明を「富山県厚生部社会福祉課長」が発行していますが、軍歴は軍が証明したのではなかったのでしょうか。

軍隊は解散されましたので、その後、軍歴の証明は、県がすることになっていました。ただ、軍歴は、あまり教員としての就職に影響はなかったと思います。

- こちらに「教職適格確認書」として、昭和 22 (1947) 年 8 月 12 日付の、富山県知事による書類がございます。ここには、「右の者は、昭和 22 年政令第 62 号第 6 条の規定によって提出した書面を審査したところ、昭和 20 年 10 月 22 日付連合軍最高司令官覚書日本教育制度に対する管理政策、同月 30 日付同覚書教員および教育

---

力者をされてきた。

<sup>55</sup> 1949 年の教育職員免許法の施行によるもの。普通免許状については一級と二級があった。1990 年以降は、専修免許状・一種免許状・二種免許状となっている。

<sup>56</sup> 引用した文面は、録音からの再現を基本としている。本文の発言中の引用については、以下同じ。

関係官の調査、除外、認可の件に掲げてある条項に当たらない者であることを確認する」とあります<sup>57</sup>。これはどのようなものでしょうか。

敗戦というか、終戦というか、価値観も、教育観も変わりましたので、新しい体制に応ずる教師として認定するというのが、こういう講習や証明でした。落ちた者がいたことは、聞いていません。ですので、形だけだったと思いますが、確か筆記テストはありました。厳しい占領軍の方針だったのでしょうか。

この頃は、教育委員会が独立してあったわけではない時期でした。そのため、知事による書類になっているのだと思います。

- 一 再教育講習の修了証書が2通ございます。一つは、「再教育講習会修了証書」として、昭和23(1948)年8月5日から9日、会場名は魚津、大町小、専門科目が法規10時間、教職科目が心理10時間となっています。もう一つは、「現職教員再教育講習修了証」として、昭和25(1950)年3月に富山県教育委員会が出しています。内容は、認定時間が65時間、一般的課程20時間、専門的課程30時間、教職的課程15時間となっています。

これは、戦後になって必ず受けなければならなかったものでした。新しい教育のためにということで夏休みなどに通わされました。旧から新に変えるとき、古い免許状は書き換えないと、教員になれないというものでした。大きい講堂にいっぱいの人が集められました。同じ県内でも3~4か所にまとめて受講しました。費用はかからなかったと思いますが、出席はきちんと取っていました。この他にも講習があったと記憶しています<sup>58</sup>。

- 一 昭和25(1950)年9~10月に、図書館講習会の修了証がありますが、これは司書

---

<sup>57</sup> 占領軍の指令「日本教育制度ニ対スル管理政策」(1945年10月22日)と「教員及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件」(同年10月30日)により「職業軍人」「軍国主義、極端ナル国家主義ノ鼓吹者」等の教職からの罷免などが日本政府に命令された。そのため、「教職追放令」と総称される一連の法令が1946年5月までに制定され、教職員の適格審査が進められた。現任者の大部分が審査を終了した翌1947年5月には、「教職員の除去、就業禁止等に関する政令」(1947年5月21日政令第62号)などにより改正されて、就職予定者の資格審査的色彩が強くなっていた(国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第1巻、教育研究振興会、1974年、1228~1238頁)。1951年6月までの数字として、都道府県教員適格審査委員会での審査総数123万6151名中、不適格者3930名とある(同上書)。なお、『富山県教育史』下巻(同編さん委員会編、富山県教育委員会、1972年、869頁)では、不適格者数が「本県では一一七名の多きを数えている」(1947年10月時点)と記載されている。

<sup>58</sup> 富山県の高等学校では1948~1950年の3年間にわたり、11~13日間の再教育講習が行なわれた。これは「県下の小・中・高全教員を対象とした強制義務的な講習」であり、内容は、「新しい教育の理念、カリキュラム・ガイダンス、社会科等の戦後教育の特徴的なもののほか、各教科内容にも及んでいた」と説明されている(前掲『富山県教育史』下巻、851頁)。

に関わるものでしょうか。

私は、学校での図書館での仕事が多かったので、このときに司書の資格を取りました。

— また、浄土真宗大谷派の「教師」検定試験の合格書類がございますが、「教師」とは、どのようなものなのでしょうか。

一般の僧侶は、得度をすれば、誰でもなれるものですが、説教をしたり、一般の指導をしたりは「教師」資格でした。他にも、本山での試験や研修もありました。

— 貴重なものをお見せくださいますて、ありがとうございます。とても、この時間だけでは、すべてのお話を伺うことができませんでした。ぜひ、もう一度、お話を伺う機会を頂ければ幸いに存じます。

わざわざお越しいただいて恐縮です。私にとって、恥ずかしい面もありますが、書いて残していただければ、何かのお役に立てることもあると思います。

— 本日は、長い時間、本当にありがとうございました。

## 後記

「はじめに」で述べたように、まことに残念ながら、蛭川先生が日本史教師として活躍された時期のお話を伺うことはかなわなかった。また、以上のインタビュー記録は、ご本人の確認を経ていない。記録の編集に際して、最大限の注意を払ったつもりではあるが、思わぬ間違いを犯していないことを祈るのみである。

故郷の富山県でのこと、戦争中・敗戦後の生活や勉学、富山県での教員生活の始まりなどについて、お手元のさまざまな書類や書籍などをお持ち下さってのお話であった。当時のことに知識の乏しい聞き手に対して、具体的に丁寧な説明をして下さったのが印象に残る。伺ったすべてのことを十分にまとめきれていないことは、恥じ入るばかりである。

最後に、インタビュー記録としての刊行をお許し下さり、原稿のご高閲まで賜ったご家族に厚く御礼を申し上げますと共に、蛭川壽恵先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(文責：茨木 智志)